

# 誰もが楽しめる空間求め

## ミニシアターは今④



本にイヤホンを通すと、視  
覚的な情報と言葉で伝る「音  
声ガイド」が聞こえる。ス  
クリンには、誰が何を話して  
いるかわかりやすく、パ  
ラフリー字幕」も表示される。

「夜、高架下の通り。歩道を  
犬を連れて歩く男性の姿」  
「冒険者のヒースが道場の外で  
待つ」

東京・田端にある席の小さな映画館「シネマ・チュウキ・タバタ」。すべての映作品に音声ガイドと字幕が付き、車いすの人とつながれる、なくてはならない場所。という。



代表の平塚千穂子。2階には音声ガイドの制作などをとするスタジオがある  
音声ガイドを聞くイヤホン端末が全席に取り付けられている



シネマ・チュウキ・タバタ

研ぎ澄まされた感覚に驚かされた。視覚障害者の映画鑑賞を後押しするボランティア団体「シ・ティ・ライツ」を立ち上げ、15年活動を続けた後、2016年にチュウキをオープンさせた。「見えにくい人、聞こえない人はそれぞれの感覚で声色、感情、監督の意図を感じ取っている。一緒に見ることで、映画を豊かにしてもらって、映画の光。光はすべての人に平等に降り注ぐ、コロナで考えるようになった映画館の役割、色々な人が集い、共存し、認め合う場の価値を伝えていきたい」

「一方、様々な交流を通して可能性も感じていた。「諦めない」をテーマに、"諦めない人"という思いが原動力となっていた。「それぞれ想像できない部分がある影になる、それでも、歩み寄り理解し合っていくプロセスが踏めた」

手話から音響へ変換する難しさ、互いの表現の奥深さを尊重しながら、根底にある「大事なものを」を丁寧に、平塚は「作り手から観客へ、それぞれ

そんなチュウキが製作に関わった映画「この通訳者たち」が10月から各地で公開される。聞こえない人に生の演劇の感動を伝えようと挑戦する舞台手話通訳者たち。その姿を追った記録映像に音声ガイドを付けていくことによって、見えにくい人向けようとする試みを追った重層的なドキュメンタリーだ。前作がチュウキで上映された監督の山田礼次郎(つ)が「情景の説明だけでなく映画の深いところに入り込んでいく」という音声ガイド作りの過程に感銘を受けた。

「敬称略(佐藤節)